小学生のジェンダー形成

多々納道子*・若林真由美**
（*島根大学教育学部人間生活環境教育講座，**島根県立石見養護学校）

The Formation of Gender Roles of the School Children

Michiko TATANO and Mayumi WAKABAYASHI

島根大学生涯学習教育研究センター
平成18年３月

小学生のジェンダー形成

多々納道子*・若林真由美**
（*島根大学教育学部人間生活環境教育講座，**島根県立石見養護学校）

The Formation of Gender Roles of the School Children

Michiko TATANO and Mayumi WAKABAYASHI

Abstract

The purpose of this study is to evaluate the factors affecting the formation of gender roles of school children. The results are as follow :

Compared with boys, girls tend to be free in concepts and behavior. Both of them, the factors affecting the formation of gender roles are revealed by the guidance of their teachers in using quantification Ⅰ. Especially in the case of girls, factors were affected by their mothers. Therefore, the teachers have to have workshops changing the gender roles.

Ⅰ．目的

近年我が国は、平均寿命の伸長によって長寿世界一を維持しているが[1)]、一人の女性が生涯に生む子どもの数を示す合計特殊出生率の急激な低下という要因が相まって、これまで経験したことのないような少子・高齢化社会を迎えようとしている。また、日本の総人口は、2006年度から自然減に転じることが予測されている。そのため、国力や国家の繁栄を維持し、豊かな未来を築いていくには何をすべきかという国家的な見地から、少子化対策が緊喫の課題になってきた。このことは個人や家族に対して、同様の問題を提起するもので、我々はどう生きるのか、どのような社会を構築するのかについて、根本的な問いを投げ掛けるものとなる。

このような課題に対して、様々な観点から論議されているが、経済協力開発機構（OECD）の2002年の統計によると[2)]、女性が積極的に政治や経済活動に参加している程度を示す国連開発計画によるジェンダー・エンパワーメント指数（GEM）が高い国々は、出生率も高い傾向にあることが実証されている。これらのことから、「すべての個人が互いにその人権を尊重し、喜びも責任も分かち合いながら、性別にかかわりなく、個性と能力を十分に発揮できる社会」[3)]である男女共同参画社会を実現し、豊かな未来を築くことが少子化への歯止めにつながるものと考えられる。男女共同参画社会の形成は、生涯学習社会における現代的課題となっており、家政教育に期待されるところ大である。

この男女共同参画を推進する際の鍵になる概念が、ジェンダーである。ジェンダーは、文化的、社会的に形成された性差を意味しており、子どものジェンダーの形成にはしつけや教育が大きくかかわってくる[4) 5)]。したがって、子ども達がジェンダーから解き放たれるには、形成されるメカニズムを明らかにするとともに、ジェンダーが再生産されないような教育システムを考えることが重要である。

これまで、中学生や中学校教員を対象に調査し、ジェンダー観の形成要因を明らかにしてきた[6)7)]。本稿では、中学校に接続する小学校６年生を対象に調査し、中学生に対すると同様に、ジェンダー観の形成に関わると考えられる要因を取り上げて、特徴を把握するとともに、その構造について検討することを目的とした。

Ⅱ．方法

１．調査対象は、島根、鳥取、山口、岡山および広島県の小学校９校の６年生、男子330人と女子300人であった。回収率は100.0%であったが、無効回答が１人あったため、有効回収率は99.8%となった。したがって、男子330人、女子299人の計629人を分析の対象とした。
２．調査方法は、質問紙法により各学級担任の下で、アンケート調査を実施した。
３．調査時期は、2001年10月下旬～11月下旬であった。
４．調査内容は、家族状況、性別役割分業意識、ジェンダー、家庭の仕事の実践状況、家族の勉強と家庭の仕事についての考え方、家庭および学校での性役割期待、家庭の仕事の実践への期待などであった。

Ⅲ．結果と考察

１．家族状況

ジェンダー観形成に影響を及ぼすと考えられる調査対象者の家族の特徴を、祖父母との同居状況、母親の就労状況およびきょうだいの構成によって把握した。図表による表示は、省略した。

（１）祖父母との同居状況

男女とも祖父母と「一緒に住んだことはない」が46.1%で最も多く、次いで「現在一緒に住んでいる」の38.4%であった。これに「以前に一緒に住んでいた」の14.7%を合わせると53.1%となった。このように、祖父母と一緒に住むことによって関わりをもち、影響を受ける環境にあったものが、ないものに比べて若干多いという実態であった。

（２）母親の就労状況

子どもからみた母親は、その72.1%のものが「職業をもっている」とし、「職業をもっていない」のは25.9%であった。母親の就労が、子どものジェンダー形成に影響を与えることを予測できる状況といえる。

（３）きょうだいの構成

性別に基づくきょうだいの構成をみると、同性のみは33.5%、男女混合が59.6%、一人っ子は6.6%であった。本調査対象者の一人当たりのきょうだい数は、男女とも2.5人であった。

２．小学生のジェンダー

（１）性別役割分業意識

中学生を対象にした性別役割分業意識に関するこれまでの調査結果をみると[8)]、男女差が明白で、女子は男子に比べて「男は仕事、女は家庭」という考え方に否定的であった。

同様の調査によると、小学生は表１に示すように、「男は仕事、女は家庭」という考え方に「どちらでもない」というものが36.0%と最も多かった。次いで「どちらかといえば賛成」が21.2%、これに「賛成」の13.9%を合わせると35.1%になった。また、「どちらかといえば反対」という13.3%と「反対」の14.2%を合わせると27.5%となり、賛成というものに比べると少なかった。したがって、男子は「どちらでもない」というものを除くと、「男は仕事、女は家庭」に賛成の方が多く、肯定的な傾向にあるといえる。

女子では、「反対」が34.4%と最も多く、これに次いで「どちらでもない」が28.0%であった。男子と同様に大きく賛成か反対かに二分してみると、「賛成」という4.0%と「どちらかといえば賛成」の12.3%を合わせた賛成が16.3%であった。これに対して、「反対」に「どちらかといえば反対」の20.0%を合わせた反対は54.4%になり、固定的な性別役割分業意識には反対のものが、賛成というものの３倍以上を占めた。

男女間でχ^2検定を行うと、１%水準で有意差があった。したがって、小学生も中学生と同様に、男女差が明白で、女子が男子と比較して性別役割分業に関する固定的な考え方には、否定的であることが確認された。

以上のように、小学生男子は固定的な性別役割分業意識を肯定し、女子は否定的であるというように、中学生とほぼ共通の傾向がみられた。これは考え方を形成するにおいて、家庭や学校という社会化の作用が働き、成人男女の捉え方がモデルになっていると考えられる[9)]。したがって、男女とも分業意識から共業意識に変化させ、男女差を解消するような補正教育が必要となる。

表１　性別役割分業意識

人（%）

	男子	女子	全体	χ^2値
賛成	46(13.9)	12(4.0)	58(9.2)	58.25**
どちらかといえば賛成	70(21.2)	37(12.3)	107(17.0)	
どちらでもない	119(36.0)	84(28.0)	203(32.2)	
どちらかといえば反対	44(13.3)	60(20.0)	104(16.5)	
反対	47(14.2)	103(34.4)	150(23.8)	
無回答	4(1.2)	3(1.0)	7(1.1)	
合計	330(100.0)	299(100.0)	629(100.0)	

＊＊…$p<0.01$

（２）ジェンダー観

ジェンダーは、男性、女性という身体的な機能からだけではなく、着る物、もち物や周囲からの働きかけなど社会的、文化的要因によって形成される。小学生のジェンダー観を明らかにするため、職業、知的及び家事能力、言葉使い、性格、おしゃれなどのジェンダー観を示す、10項目について調査した。各項目について「そう思う」を４点、「どちらかといえばそう思う」３点、「どちらかといえばそう思わない」２点、「そう思わない」を１点とする、４段階評定尺度によって得点化した。すなわち、これらの得点が低いほどジェンダーに捉われない傾向にあることを示すものである。結果を表２に示した。

得点の傾向からみると、男子の方が女子よりも全ての項目で得点が高く、程度の差はあれ、総じてジェンダーに縛られているといえる。

男女とも最も得点の高いのは、「男子は女子よりもたくましい方がよい」で男子2.77、女子2.74であった。次いで高得点にあるのは、「女子は男子よりも料理が得意である」で男子2.67、女子2.61であった。これら２項目は男女の得点差が少なく、共通した受け止め方をしているといえる。その他、男子で高得点の項目は、「女子はおとなしくて優しい方がよい」と「女子は男子よりていねいな言葉を使うとよい」であり、家事能力、性格や言葉使いに関してこだわりがあるといえる。女子の高得点の項目数は男子ほど多くなく、男子と比べるとジェンダーに縛られる傾向が少ないといえる。

逆に、得点が低いものは、「女子には青色や黒色の服は似合わないと思う」で男子1.73、女子1.22、「男が洗たく物を干しているのはみっともないと思う」は男子1.79、女子1.52であった。男女間の捉え方の違いを明らかにするため、t検定を行ったところ、男女がともに高得点であった「女子は男子よりも料理が得意である」と「男子は女子よりもたくましい方がよい」を除く他の全ての項目について１％水準で有意差があった。

したがって、男子は女子よりもジェンダーを意識した受け止め方をする傾向にあるといえる。小学生は中学生よりも男女差が顕著であり、学年の進行によって差異が拡大するというよりも、早い学年段階から、ジェンダーが刷り込まれていくのではないかと考えられる。したがって、子ども達の身体的な性差が少ない段階であっても、ジェンダーに捉われない教育をすることが重要であるといえる。

表２　ジェンダー観

（点）

	男子		女子		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
男子は女子よりも成績がよい	1.94	1.07	1.60	0.97	4.54**
女子は男子よりも料理が得意である	2.64	1.22	2.61	1.16	0.66
男子が人前で泣くのは情けない	2.73	1.22	2.36	1.21	3.94**
女子は男子よりもていねいな言葉を使うとよい	2.42	1.25	1.94	1.05	5.30**
男子は女子よりもたくましい方がよい	2.77	1.20	2.74	1.14	0.32
女子はおとなしくてやさしい方がよい	2.66	1.19	1.87	1.00	9.34**
男子がおしゃれをするのはおかしい	2.37	1.26	1.95	1.07	4.54**
女子には青色や黒色の服はにあわない	1.73	0.96	1.22	0.56	8.33**
男が洗たくものを干しているのはみっともない	1.79	1.08	1.52	0.79	3.65**
結婚して子どもが生まれたら女子は仕事をやめた方がよい	2.24	1.17	1.76	1.02	5.51**

＊＊…p<0.01

（３）男女平等観

次世代を担う小学生が、家庭、学校と社会における男女の地位をどの様に理解しているのかを明らかにした。

表３より、まず家庭についてみると、男子は「平等である」と捉えるものが最も多くて42.1%、女子は35.7%、「どちらでもない」は男子が38.4%、女子は最も多くて41.8%であった。このよ

うに、「平等である」と「どちらでもない」とするものが多く、男女とも両者を合わせると約80%を占めた。

学校に関しては、男女とも「どちらでもない」というものが最も多かったものの、男子は34.2%であるのに対し、女子は45.8%という高率を占め、男女差が顕著であった。これに次いで「平等である」が、男子が34.2%、女子が33.7%とほぼ同率であった。男子は４人に１人が「不平等である」と理解しているのに対し、女子は５人に１人にも達せず、男女差がみられた。

社会については、「不平等だと思う」ものが男子41.8%、女子47.8%と男女とも最も多く、次いで「どちらでもない」とするものが、ともに40%弱を占めるというように、家庭と学校についての受け止め方とは異なって、不平等観が極めて強かった。

これら家庭、学校と社会についての男女平等観に男女差があるかどうかを明らかにするため、χ^2検定を行ったところ、学校についてのみ５％水準で有意差があり、男女のとらえ方がはっきりと異なっていることがわかった。

表３　男女平等観

人（%）

		平等である	どちらでもない	不平等である	無回答	χ^2値
家庭	男子	139(42.1)	127(38.4)	59(17.8)	5(1.5)	2.42
	女子	107(35.7)	125(41.8)	60(20.0)	7(2.3)	
学校	男子	113(34.2)	127(38.4)	85(25.7)	5(1.5)	6.61*
	女子	101(33.7)	137(45.8)	53(17.7)	8(2.6)	
社会	男子	58(17.5)	124(37.5)	138(41.8)	10(3.0)	5.96
	女子	33(11.0)	107(35.7)	143(47.8)	16(5.3)	

＊…p<0.05

3.家庭の中の小学生

（１）家庭の仕事の実践状況

小学生がどの程度、家庭の仕事を実践しているかを明らかにするため、洗たく、料理、そうじなどの衣食住や買い物、ゴミ出しなどの生活全般に関する仕事の中から９つ選び、各々について「毎日する」を５点、「よくする」を４点、「時々する」を３点、「たまにする」を２点、「全くしない」を１点とした、５段階評定尺度によって得点化した。得点が高いほど、家庭の仕事を実践している程度が高いことを示している。

表４に示した得点から判断して、男子がよく実践している家庭の仕事は、「ペットや植物の世話をする」が2.72、「ふろを洗う」2.70、「へやをそうじする」2.52、「家族に頼まれた買い物をする」2.34という順位であった。逆に程度の低いものは、「洗たく機で洗たくをする」が1.57、「食器を洗う」2.09、「ゴミを決められた方法で出す」2.16、「洗たく物をたたむ」2.17などであった。女子では、「ペットや植物の世話をする」3.28、「洗たく物をたたむ」2.87、「簡単な料理をする」と「へやをそうじする」が2.83とともに同じ得点であって、衣食住に関する内容がよく行われていた。程度の低いものは、「洗たく機で洗たくをする」が1.88、「ゴミを決められた方法で出す」が2.37であった。

このように男女とも最も家庭の仕事を実践しているのは「ペットや植物の世話をする」で、あまりしていないのは「洗たく機で洗たくをする」という点は共通していた。子どもが一人でも取り組みやすい内容はよく行うが、家族全員に関わって取り組むというような内容は、あまりやっていないことが分かった。

その他の内容の順位は、男女間で幾分異なっていた。また、家庭の仕事を実践する程度も男女で異なっており、違いを明らかにするため、t検定を行ったところ、「ゴミを決められた方法で出す」が５％水準で、「洗たく機で洗たくをする」、「洗たくものをたたむ」、「簡単な料理をする」、「食器を洗う」、「へやをそうじする」、「ペットや植物の世話をする」の６つの内容においては、１％水準で有意差が認められた。したがって、男子と女子では家庭の仕事の実践状況にかなりの差異があるといえる。これまでに行われた家庭の仕事の実践状況を明らかにした調査結果と同様に、男子と比較して女子の方が総じてよく行っており、今後さらに改革するための取り組みが必要である。

表４　家庭の仕事の実践状況

（点）

	男子		女子		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
洗たくきで洗たくをする	1.57	0.97	1.88	0.98	3.94**
洗たく物をたたむ	2.17	1.03	2.87	1.11	8.43**
簡単な料理をする	2.28	1.14	2.83	1.18	6.15**
食器を洗う	2.09	1.02	2.77	1.20	7.70**
へやをそうじする	2.52	1.05	2.83	1.09	3.80**
ふろを洗う	2.70	1.38	2.62	1.26	0.75
家族にたのまれた買い物をする	2.34	1.25	2.48	1.17	1.53
ゴミを決められた方法で出す	2.16	1.37	2.37	1.34	2.03*
ペットや植物の世話をする	2.72	1.59	3.28	1.58	4.59**

＊…p＜0.05　＊…p＜0.01

（２）勉強と家庭の仕事のバランス

家族による子どものしつけは、子ども達の考え方や将来の生き方に強い影響を及ぼす。子どもからみた家族が考える勉強と仕事のバランスの取り方について尋ねた。

表５より、男子の場合、家族は「勉強も手伝いもしなくてはならない」と考えていると答えたものが43.9％、「勉強さえしていれば手伝いはしなくてよい」は9.6％、「勉強よりも手伝いをたくさんしてほしい」は3.9％であった。このように、家族は勉強も手伝いもともにというように、両者のバランスを重視する捉え方をしていると考えるものが多かった。

女子が捉える家族の考え方は、割合は異なるものの、男子とほぼ同様の傾向にあった。ただ、「勉強も手伝いもしなくてはならない」というものの割合は男子と比べると若干多く、逆に「勉強さえしていれば手伝いはしなくてよい」は、4.0％と男子の約半数であった。「勉強よりも手伝いをたくさんしてほしい」は、男女ほとんど変わらない値であった。これら男女が理解する家族の考え方に違いがあるかどうかを明らかにするため、χ^2検定を行ったところ、５％水準で有

意差が認められた。

したがって、女子は男子よりも、家族が勉強も手伝いもともに重視すると捉えているものが多いということは、女子の方が固定的な性役割期待を敏感に受け止め、自ら性役割を選択しているといえる[10)]。

表５　家族の勉強と家庭の仕事についての考え方

	男子	女子	全体	χ^2値
勉強さえしていれば手伝いはしなくてよい	32(　9.6)	12(　4.0)	44(　6.9)	
勉強も手伝いもしなくてはならない	145(43.9)	143(47.8)	288(45.7)	
勉強よりも手伝いをたくさんしてほしい	13(　3.9)	11(　3.6)	24(　3.8)	7.84*
わからない	136(41.2)	127(42.4)	263(41.8)	
無回答	4(　1.2)	6(　2.0)	10(　1.5)	
合計	330(100.0)	299(100.0)	629(100.0)	

＊…p＜0.05

（３）家庭の仕事の実践への期待

家族の子どもに対する家庭の仕事の実践への期待を、子どもの側から調査した。「家族はあなたに手伝いをしなさいと言いますか」という質問を設け、「いつも言われる」、「時々言われる」、「全然言われない」のいずれかによる回答を求めた。

表６から、男女とも最も多いのが「時々言われる」というもので、男子68.4％、女子65.8％と、男女差はほとんどなかった。次いで、「いつも言われる」とするもので、男子21.2％、女子27.7％、「全然言われない」というのは、男子10.0％、女子6.0％であって、「いつも言われる」と「全然言われない」が男女で対照的な結果であった。また、「いつも言われる」と「時々言われる」を合わせると、男子は89.6％、女子は93.5％であった。子どもからみて家族は家庭の仕事を積極的に実践することを求めており、その傾向は男子よりも女子の方がより一層期待されていると捉えていることが明らかとなった。

表６家族による家庭の仕事の実践への期待

	男子	女子	全体	χ^2値
いつも言われる	70(21.2)	83(27.7)	153(24.3)	
時々言われる	226(68.4)	197(65.8)	423(67.2)	5.98
全然言われない	33(10.0)	18(　6.0)	51(　8.1)	
無回答	1(　0.3)	1(　0.3)	2(　0.3)	
合計	330(100.0)	299(100.0)	629(100.0)	

さらに、家庭の仕事の実践は家族の誰に言われるのかを尋ねたところ、男女とも最も多いのが「母親」であった。その割合は男子が67.9％、女子が75.7％と極めて多かった。次いで、「父親」が男女に11.1％、「祖母」が男子に4.7％、女子に7.1％という割合であった。その他の家族である祖父や兄弟姉妹などは、ほとんどしつけをしていなかった。

誰が家庭の仕事の実践をしつけているかという点からみると、父母であれば母親が、祖父母では祖母がというように、女性が主に担っており、家庭の仕事という性格上、より一層女性の

役割になっているものと考えられる。

（４）家族からの性役割の期待

これまで日本では、家族は子供に対して「男らしく、女らしく育てるのがよい」というように、ステレオタイプの性役割に関するしつけをする傾向にあった。小学生に対しては、どうであろうか。家族の子どもに対する性役割の期待を子どもの側から尋ねた。「家族はあなたに男だから、あるいは女だから～しなさいと言いますか」という質問を行った。

表７のように、男女とも「全然言われない」というものが最も多く、男子は66.6%、女子は49.4%であった。次いで「時々言われる」というもので、男子24.8%、女子36.1%であった。これに、「いつも言われる」というものを加えると、程度の差はあれ、家族が子どもに性役割を期待し、その役割を遂行するようにしつけるものの割合は、男子32.0%、女子49.8%となった。

これら男女間の違いを明らかにするため、χ^2検定を行ったところ、１%水準で有意差が認められた。したがって、男子と女子では家族からの性役割の期待に大きな差異があり、女子の方が「女だから～しなさい」ということをよく言われていることがわかった。

では、このような性役割の期待を家族の誰から言われるのかを尋ねた。

その結果、「母親」が男子50.0%、女子55.0%と最も多かった。次いで「父親」であり、男子は27.3%、女子には14.7%となっていた。「祖母」については、男子は3.7%、女子は18.1%であった。父親と祖母は、割合は異なるものの、自分と同性の子どもの方に性役割の期待をしつける傾向にあることが理解できた。そして、家庭の仕事についてのしつけと同様に、母親が中心的な担い手であること、母親以外の家族は、しつけの担い手として、同性の子どもの方により一層の期待をかけるという共通の傾向が認められた。

以上のことから、家庭はジェンダーの再生産の場としての機能を依然と果たしていること、そしてその担い手は他でもない母親や祖母の女性であることが分かった。

表７　家族からの性役割の期待

	男子	女子	全体	χ^2値
いつも言われる	24(　7.2)	41(13.7)	65(10.0)	20.78**
時々言われる	82(24.8)	108(36.1)	190(30.2)	
全然言われない	220(66.6)	148(49.4)	368(58.5)	
無回答	4(　1.2)	2(　0.6)	6(　0.9)	
合計	330(100.0)	299(100.0)	629(100.0)	

＊＊…p＜0.01

４．学校の中の小学生

（１）学校での性役割の期待

これまでの学校経営、教師の意識などを見直すと、そこには根強い性差別や性別役割分業意識、期待される男女像が浮かび上がってくる。しかし、他方では、男女混合名簿の採用、教育内容や方法の見直しなど、学校教育を取り巻く様々な事柄が、男女平等教育の視点から見直され始めている。小学校教員を対象にした調査では、教員自身は意識の上では、性別によって異なる取り扱いをすることはあまりないという結果が示されている。

そこで、このような教員の下で指導を受けている小学生は、学校生活をどのように感じているだろうか。このことを明らかにするため、まず、学校での性役割の期待について調査した。学校での性役割の期待を子どもの側から求めることにして、「あなたは、学校で男だから、女だから～しなさい」と言われることがあるかについて尋ねた。

表８に示すように、「全然言われない」というものが男子74.2%、女子80.2%と最も多く、非常に多かった。「時々言われる」は、男子が21.8%、女子が15.0%であり、「いつも言われる」のは、男子2.1%、女子1.6%と極めて少数であった。このように、学校では男子の方が、「男だから～しなさい」と言われる割合は幾分多いものの、有意な差異ではなかった。

表８　学校での性役割の期待

	男子	女子	全体	χ^2値
いつも言われる	7(　2.1)	5(　1.6)	12(　1.9)	4.74
時々言われる	72(21.8)	45(15.0)	117(18.6)	
全然言われない	245(74.2)	240(80.2)	485(77.1)	
無回答	6(　1.8)	9(　3.0)	15(　2.3)	
合計	330(100.0)	299(100.0)	629(100.0)	

これらの中から、「いつも言われる」と「時々言われる」というものについて、誰に言われるかを尋ねたところ、男子は「女子」が31.6%でもっと多く、次いで「女の先生」24.0%、「男の先生」22.7%で、「男子」は15.1%で最も少なかった。女子については、「男子」が52.0%と半数以上を占めて最も多く、「女の先生」22.2%、「女子」14.0%、「男の先生」6.0%という順位であった。

このように、学校においては、教員よりもむしろ子ども達の中で、お互いが「男だから、女だから～しなさい」とジェンダーを強化しあっていることが明らかとなった[11)]。子ども達に対して、ジェンダーに捉われない教育がこれまで以上に必要であると言える。また、教員は、男子に対しては、男子の教員がしつける傾向にあった。女子の教員は男女共通にしつけるというように、家庭での母親のように、性差や性役割に関するしつけ・教育の担い手意識が強かった。

教員を対象にした調査からは、性別による異なる取り扱いをしたものは、非常に少なかったが、子どもからみると、必ずしもその通りには受け止められていなかった。したがって、教員に対して子ども達にジェンダーに捉われない教育を実施することの重要性とともに、具体的な方法を学ぶ研修が必要となる。

さらに、子ども達が性役割を期待された時に、どのような気持になるのかを尋ねた。

男女とも「いやだと思う」ものが最も多く、男子37.5%、女子48.8%であった。次いで「少しいやだと思う」で、男子32.4%、女子34.7%となった。このようにいやだと思うものの割合は、男子よりも女子の方が多く、その割合は男子が69.9%、女子は83.5%であった。逆に、「何とも思わない」のは、男子27.5%、女子14.0%となり、男子は女子の約２倍を占めた。

男女間の違いをχ^2検定によって求めると、１%水準で有意差が認められた。女子の方が全般的に性役割を期待される場合が多いことを反映しているが、性役割を期待されることに不快感をもつものが多いといえる。

（２）係り活動の性別役割分業意識

児童会長は男子、副会長は女子の役割というように、学校における係り活動には、性別役割分業意識が顕著にみられてきた。係り活動の分担状況は、子ども達にステレオタイプの性別役割分業意識を形成する要因になる。そこで、学校での係り活動の中から「応援団の団長」、「歌の伴奏」、「ほけん係り」と「体育係り」を取り上げて、それぞれ男子向きか女子向きと思うかについて尋ねた。

表９より、「応援団の団長」は、「男子向き」とみなすものが男女とも最も多く、男子59.3%、女子49.4%という割合であった。次いで「どちらでもない」で、「男子向き」とするものよりも割合はやや少ないが、それでも男子38.1%、女子46.4%という高率であった。「歌のばんそう」については、「女子向き」とするものが男女とも約60%を占めて最も多く、次が「どちらでもない」とするものであった。これについても30～40%という割合を占めた。「ほけん係り」については、「どちらでもない」と「女子向き」ととらえるものに二分された。「体育係り」は、男子は「男子向き」、女子は「どちらでもない」と捉える向きが強かった。

男女の違いをみるため、χ^2検定を行ったところ、「応援団の団長」、「ほけん係り」と「体育係り」には、１%水準で有意差があり、男女による捉え方が異なっていることが理解できた。

表９　係り活動の性別役割分業意識

		男子向き	女子向き	どちらでもない	無回答	χ^2値
応援団の団長	男子	196(59.3)	126(38.1)	126(38.1)	5(1.5)	9.36**
	女子	148(49.4)	10 (3.3)	139(46.4)	2(0.6)	
歌のばんそう（ピアノ）	男子	5(1.5)	210(63.6)	110(33.3)	5(1.5)	4.53
	女子	2(0.6)	172(57.5)	123(41.1)	2(0.6)	
ほけん係り	男子	8(2.4)	143(43.3)	172(52.1)	7(2.1)	9.26**
	女子	0(0.0)	151(50.5)	146(48.8)	2(0.6)	
体育係り	男子	185(56.0)	3(0.9)	136(41.2)	6(1.8)	33.2**
	女子	101(33.7)	4(1.3)	192(64.2)	2(0.6)	

＊＊…p<0.01

５．小学生のジェンダーの構造

小学生のジェンダー形成に影響を与えると考えられる要因について、その特徴を把握した。さらに、それらの要因の影響力を求めるために、祖父母との同居状況、母親の就労状況、きょうだいの構成、家族の勉強と家庭の仕事についての考え方、家庭の仕事の実践への期待、家族からの性役割の期待および学校での性役割の期待の７つを取り上げ、数量化Ⅰ類によって分析した。これは、質的な要因に関する情報に基づいて、量的に測定された外的基準の値を説明するための方法である。カテゴリースコアがマイナスを示しているものは、ジェンダーの形成を促進する条件であり、プラスを示すものは、抑制し、フェミニスト的意識を高める条件となる。

カテゴリースコアの範囲（最大値と最小値）を示すレンジによって、各項目のジェンダー観を形成する男子への影響力を表10からみると、「家族の性役割の期待」が4.629で最も大きいレンジを示した。次いで「学校での性役割の期待」2.235、「家庭の仕事の実践への期待」1.864、「家族の勉強と家庭の仕事についての考え方」が1.336という順位となった。逆にレンジが低く、

影響をそれほど与えないのは、「母親の就労状況」や「きょうだいの構成」などの家族状況であった。このように高順位にあるものは、家族や学校での性別役割分業に関するしつけ・教育や実践というように、小学生に直接的に働きかける要因であった。

表10　ジェンダー観の形成要因（男子）

アイテム	カテゴリー	カテゴリースコア	レンジ	影響の順位
祖父母との同居状況	一緒に住んだことはない	0.356	1.026	5位
	以前、一緒に住んでいた	−0.670		
	現在、一緒に住んでいる	−0.239		
きょうだいの構成	同性のみ	0.174	0.721	6位
	男女混合	−0.033		
	一人っ子	0.547		
母親の就労状況	有職	−0.094	0.357	7位
	無職	0.281		
家族の勉強と家庭の仕事についての考え方	わからない	−0.458	1.336	4位
	勉強よりも手伝いをたくさんしてほしい	0.878		
	勉強も手伝いもしないといけない	0.419		
	勉強さえしていれば手伝いはしなくてよい	0.297		
家庭の仕事の実践への期待	全然言わない	0.570	1.864	3位
	時々言う	−0.507		
	いつも言う	−1.357		
家族の性役割の期待	全然言わない	1.104	4.629	1位
	時々言う	1.880		
	いつも言う	−3.525		
学校での性役割の期待	全然言われない	0.032	2.235	2位
	時々言う	−0.080		
	いつも言う	−2.155		

女子については、図表は省略したが、レンジの高いものは１位が「家庭の仕事の実践への期待」で3.050、２位が「学校での性役割の期待」2.364、３位が「家族の性役割の期待」、４位が「家族の勉強と家庭の仕事についての考え方」1.907という順位で、男子と若干順位は異なっていたが、しつけや教育の影響が大といえる。レンジの低いものは、得点は異なるものの、男子と同様に家族状況に関わる要因であった。

これまで明らかにした中学生と比べると、中学生では男女とも学校での性役割の期待が１位であったが、きょうだいの構成や母親の就労状況のレンジが高く、ジェンダー観の形成に大きな影響を与えていた。中学生では取り巻くモデルの影響が結構強いが、小学生ではむしろ直接的なしつけ・教育の方が大きなウエイトをもつというように、学年段階によって形成要因が異なるといえる。

このようにジェンダーの形成要因が異なるということを踏まえた、しつけ・教育が重要にな

る。

Ⅳ．要約

我が国の将来を見通して、豊かな未来を築くには、男女共同参画社会の推進が重要な課題となる。この男女共同参画を推進する際に、鍵となる概念がジェンダーである。文化的、社会的な要因によって形成されるジェンダーは、家庭や学校におけるしつけや教育が大きくかかわってくる。前報では、中学生を対象にしてジェンダーの形成を明らかにしたので、本報では小学生を対象にアンケート調査を行い、ジェンダーの形成について中学生と比較検討を行った。

数量化Ⅰ類による分析を行うと、小学生の男女ともジェンダー形成の要因とみなされるのは、家族や学校での性役割期待、家庭の仕事の実践への期待など直接的なしつけや教育であった。子どもにとってモデルとなる祖父母との同居状況、きょうだいの構成や母親の就労状況などの影響は、中学生の場合と比較して少なかった。したがって、小学生に対しては、家庭と学校とが連携して固定的な性別役割分業意識や分業行動を解消するようなしつけや教育を行うことが一層重要になる。

参考文献

１）厚生労働省『平成16年簡易生命表』、2005年

２）OECD　資料　2002年

３）内閣府編『平成14年版　男女共同参画白書』財務省印刷局、2003年、p.189

４）藤田英典「教育における性差とジェンダー」『東京大学公開講座性差と文化』東京大学出版会、1996年、p.258

５）上野千鶴子「差異の政治学」『岩波講座現代社会学第11巻　ジェンダーの社会学』上野千鶴子他編、岩波書店、1996年、p.1

６）多々納道子、田原泰子「中学校教員のジェンダー観の形成要因」、島根大学教育学部附属臨床総合研究センター紀要第１号、2002年、pp.101～105

７）多々納道子、若築純子「中学生のジェンダー観の形成要因」、島根大学生涯学習教育研究センター研究紀要第２号、2003年、pp.15～27

８）７）と同じ

９）島根県環境生活部県民課女性政策室「男女共同参画に関する県民の意識・実態調査報告書」2000年、pp.12～13

10）相良順子「幼児・児童期のジェンダーの発達」『ジェンダーの発達心理学』伊藤裕子、ミネルヴァ書房、2000年、pp.20～24

11）上瀬由美子「友人関係」『ジェンダーの発達心理学』伊藤裕子、ミネルヴァ書房、2000年、pp.140～144